

文明に沿って

- 環境と美術 -

菊地武彦

はじめに

「先生、『絵を描くこと』は環境破壊ではないんですか。」何年か前こんな質問を投げかけた学生がいた。その学生は制作活動は環境破壊だと言い、キャンパスの外の荒れた斜面に野菜を植えて、それを作品として認めてくれと言う。事実、専門家の使う絵の具の中には鉛やカドミウムや水銀の化合物などが含まれているものもあり、それをそのまま下水に流したら河川や海洋汚染に繋がる。そこで大学では専用の筆洗器を設けて専門業者に回収させ、そういった重金属が直接下水に流れ込まないような対策をとっている。しかし先の学生の視点はそんなことでは変わらない。彼は現代文明に生きながらその文明そのものが嫌なのだ。だが自分ではその矛盾に対する答えは見つからず、「野菜を植える」という彼の思う精一杯の生産的手段を採って見せたのだ。

確かに彼の言うことは正論である。今まで我々の営んできた生活は環境にかなりの負荷を与えてきた。しかしそのように物事を単純に善悪の基準で決めてしまっていていいのだろうか。彼の理論はあまりに性急であり、二者択一的である。環境破壊かそうでないかといった割り切った考え方は、一見合理的で若者を引きつける。しかしそこには大きな落とし穴がある。すべての中間項目を排除してしまっているからだ。人間にしてもほかの動物や植物にしても、生きている以上は環境に何らかの影響を与えている。いや生きてなくても台風や地震や火山など、時として地球自身が生物の住みやすい環境に相当悪影響を与えることがある。そういったことを考えると一概に人間の行動が環境破壊ですべて悪だなどとは言えない。

最近環境に対する情報が急速に増えてきて、我々もそれに無意識ではいられなくなった。このことは決して悪いことではない。自分たちの生活している環境を意識化することにより、問題点に対する解決の糸口は自ずと見えてくるものだろう。事の善し悪しとは別に我々は環境に頼って生きており、文明というものはおそらくそういった構造を持っているのだ。

しかし彼の言葉は、自分の生きてきた環境や文明といったものをもう一度あらためて考えるきっかけを作ってくれた。彼の採用した「野菜を植える」という行為は、実は重大な意味を持っている。彼はその行為を現代文明や環境破壊から離れたものと考え採用したのであるが、実はその行為こそ、現代につながる文明の始まりであり、ある意味で『環境破壊』の始まりであったのだ。

旅の始まり

石器時代より芸術と生活とは一体であった。ラスコーやアルタミラ洞窟に残された岩窟画をみれば、人類の歴史とともに「絵を描く」行為があったことはすぐにわかる。おそらく絵画以外にもことばを使う「歌」や体を使う「踊り」といった広義の芸術は、人類の歴史とともにあったことだろう。つまり美術や音楽といった芸術は生活そのものであり、人類の歴史そのものであると言える。美術とともに文明の歴史を顧みて、それらを知り、いかなる基盤

の上に私たちが立っているのかを認識することは、自分を再確認する手助けになると考える。

ひるがえって私たちが生きている現代文明を見渡すとどうだろうか。ニュースで知る限り現代の社会は様々な矛盾やジレンマを抱えている。爆発する人口に、地球はもはやそれを支えるだけの力は残っていないと言われている。激しい貧富の差や世界各地で起こる戦争や紛争。次々と明らかになる環境問題。また、先進国における溢れるほどの情報や日々おこなわれる機械的進歩は、人間を肉体的には解放する一方、精神的には自分がいったい何者であるかを見失う一因になっていると言われている。21世紀の理想的な未来を夢見た私たちの希望は風前の灯火なのであろうか。もしそうだとすると、おそらく芸術もそのようなジレンマから逃れるすべはない。むしろ芸術はそれらを映す鏡のようなものだと言えるだろう。

しかし本当に地球全体の環境が悪化しているのだろうか。宗教と宗教は対立しているのだろうか。もしかしたらそれらは情報というブラックボックスの中だけにあるものではないだろうか。自分の家から見る景色は30年前と何ら変わっていない。山々は四季折々の彩りを見せて、渡良瀬川は涸れることなく流れている。こんな変化のないところで暮らしている私にとって、もし情報を遮断してしまえば世界が激変しているということにはわかに信じがたい。あるいは変化というものは30年や40年、人の一生くらいのスパンでは感知できないものなのか。

今までこのような様々な疑問を何もせぬまま放置してきたが、今回縁あって古代文明に沿って旅をする機会を得た。行き先は世界最古の文明といわれているメソポタミア文明発祥の地。そこからエジプト文明の地、ギリシャ文明の地、そして最後にローマ時代からルネッサンスまでを展望できるイタリアに行くことにした。これらの地域は最も早くから文明が栄えていたことのみならず、現代文明の礎を築いてきた地でもあるからだ。現在イラン、シリアなどはイスラム圏であり、イタリアはキリスト教カトリックの総本山がある。これらの地を訪ねることで、文明がどのような変遷をたどったかを実感できるのではないかと考えた。そして変化がないと感じる私の住む日本のいなかの景色は、今回の旅の目的地と何がどれほど違っているのだろうか。しかし残念ながらメソポタミア文明の重要地イラクは、2005年7月現在まだ紛争中であり入国することは出来なかった。また近隣国との国際関係と自分の日程から、イスラエルにも入国できなかった。これらの国と地域に早く平和が訪れることを祈る。
(写真 1.2)



(写真1)

ベイルート市内には内戦の爪痕
がまだ所々に残っている



(写真2)

ベイルート市内 イスラエル軍により破壊され放置された民家

謎の島イースター島

このような考えを胸に今回の旅は始まるのだが、実は旅の始まりはメソポタミア文明の地ではなくて、それより前に行っておきたいところがあった。ラパ・ヌイである。

ラパ・ヌイとはあの「モアイ」で有名な島だ。1722年のイースターにここにたどり着いたオランダ人がイースター島と名付けたこの島は、現地の言葉ではラパ・ヌイと言い、現在チリに属しているがチリ本土からは約3800km離れており、人の住む最も近い島でも約2000km離れている。日本からはまず11時間かけてフランス領ポリネシア(タヒチ島)まで行き、そこからまた4000km、5~6時間のフライトが必要である。この距離は北海道から九州までが約2000kmだと考えると実感しやすい。まさに絶海の孤島と呼ぶにふさわしい地である。

さてなぜイースター島に向かうことを思い立ったかということ、この島で起こったことは人類にとって象徴的な事件だったからである。調べていくと様々な文明も同じような運命をたどったものが多いのだ。そしてその歴史はわれわれの今後の指針になると思えたのである。

前述のようにこの島は絶海の孤島である。恐らく南極大陸をのぞくすべての陸地のうちで、最も遅く人類が住み着いた土地のひとつではないだろうか。A.D.5~6世紀頃にこの島にポリネシア人が渡ってきたと考えられているが、それ以来人々はずっとここに隔離されてきたと言ってよい。長さ約23km、幅は10kmのほぼ直角三角形をしたこの島は、日本でいうとちょうど小豆島と同じくらい大きさであるが、小さなこの島で独自の文化が開花してそして消えていったことは、島中に1000体も現存するモアイ像(写真3)やこの島で独自に作られた「ロンゴ・ロンゴ」(写真4)という文字からうかがい知ることが出来る。

文字の起源を持つ文明は数少ない。はっきりしているものはメソポタミアの楔形文字(写真5)やメキシコ先住民の絵文字、エジプトのヒエログリフ(写真6)、そして中国の漢字である。そのほかの地域の文字はそこからの応用で出来ている場合がほとんどである。周知の通り漢字は中国から輸入されたものであり、漢字の画の一部より作られたものがカタカナ

であり、漢字の草体より作られたものがひらがなである。つまり応用である。

そのこと一つをとってもイースター島民がいかに文化的に成熟していたかをうかがい知ることが出来る。しかし 1000 年以上続いたこの島の文化は短期間で崩壊している。かつて 20メートルを超えるモアイを作り、独自の文字を発明し、小さな島で数千から万を超す人口を養うことの出来た文化があつという間に崩壊してしまったのだ。しかもポンペイのように天変地異で崩壊したのではない。自らの問題によって崩壊してしまったのだ。



(写真 3)

ラノ・ララク山に放置されたモアイ像



(写真 4)

ロンゴロンゴの彫られた土産物の木。現在本物の
ロンゴロンゴは 20 数枚しか残っていない



(写真 5)

メソポタミアの楔形文字
イラン考古学博物館



(写真 6)

壁面一面に書かれたヒエログリフ ルクソール エジプト

イースター島の悲劇

ヨーロッパ人が初めてこの島に到着したのは1722年。その約50年後にやって来たスペイン人は、島の首長たちに「ロンゴ・ロンゴ」で島の領有宣言書にサインさせている。キリスト教徒やユダヤ教徒にとって「契約」は重要である。神と人間は契約によって結ばれており、契約を破ることの罪は万死に価する。何も知らない島民は軽い気持ちでサインしたのであるが、これでこの島はスペイン領になってしまった。



(写真7)

しかし何の資源もないこの島はスペインにとって利用価値のない島であった。

顔を下にして引き倒されたモアイ像

続いてその4年後の1774年、ジェームス・クック船長がこの島を訪れたときにはすべてのモアイ像が顔を下にして引き倒されていた(写真7)。船長の航海日誌には島民たちが物乞い同然の飢えた状態であったことが記されている。実際モアイの製造工場であったラノ・ララク山に行ってみると、運搬途中のモアイやまだ岩盤に背中がくっついていて、切り出し途中のモアイがたくさんある。イースター島の全モアイ約1000体中、400体までがこのラノ・ララク山に放置されたままなのだ。(写真3)

このことから文化的破壊が非常に短時間でおこなわれたことがわかる。なぜ急激な文化の破壊が起こったのだろうか。この地はユーラシア大陸のように様々な外敵が入り込めるような場所ではないことを考えると、内部の問題で崩壊したと考えるのが妥当だ。実はその謎を解く鍵は森林の減少による環境の悪化にあるというのだ。森林というと、当時死火山の火口にほんの少し灌木があるだけのイースター島では余りにもイメージしづらかったかも知れない。^① 初めにヨーロッパ人が訪れたときは、資源もなく未開に近い島民がどうやってモアイを設置したのか皆目見当がつかなかった。彼らに聞いても「自ら歩いてそこに来た。」という答えが返ってくるばかりであった。島民はその時点ですでに自分たちの先祖がおこなってきた高度な社会生活の伝統を伝承しておらず、未開人に戻りつつあったのだ。最近の花粉分析^②によれば、かつてのイースター島は高木を含む豊かな植生に覆われていたことがわか



(写真8)

半分以上土に埋もれたラノ・ララク山の運搬途中のモアイ

っている。木があれば家もできるし

暖房や調理用の燃料にもなる。さらにカヌーや生活用具も作ることが出来る。そして運搬方法には諸説あるが、いずれにせよ 10 数km離れたアフ(祭壇)までモアイを運ぶことも出来たのである。

しかし 1600 年頃までに島にあるほぼすべての木は失われてしまい、モアイはラノ・ララクの石切場に放置されたままになった。(写真 8)そればかりでなく、森林の壊滅は島民の生活を一変させた。もはや木材で家を造ることはできず、島民は洞窟や草で作った粗末な小屋に住まなければならなかった。木製カヌーも造れなくなり長い航海は不可能になり、島民は完全にこの島に隔離された。木材の繊維から作る網も作ることができず漁獲量も減った。さらに雨の度に表土が流出し、ほとんど養分のない土地となり作物の収量も大幅に減少した。このような状況の中で島民はわずかな食料をめぐる争うようになり、対立する部族のアフを破壊しモアイを引き倒した。眼には「マナ」と呼ばれる霊力が宿ると信じられており、うつぶせに引き倒されて、白い珊瑚礁や赤色凝灰岩でできた目玉は破壊された。そのため現存するモアイの眼はいまのところ白砂のビーチに建てられた「アフ・ナウナウ」で発掘されたひとつしかない。(写真 9)



(写真 9)

イースター島でただ一カ所の白砂のビーチ アフ・ナウナウ
この砂がクッションになって唯一の眼が保存された



(写真 10)

トルコの魔よけガラスとシール ナザー・ウボン
ジュ

余談になるが眼に霊力が宿るといのは世界的な共通意識らしい。トルコの土産物屋には魔よけの目玉ガラス、ナザー・ウボンジュが売られており(写真 10)モナリザの視線にはいつもどきとさせられる。日本ではガラスよけの目玉風船も売られているし、古代中国の金文の中の「懼れる」という字はつり上がった目玉を二つ書いてそれに当てている。(写真 11)さらにギリシャ神話に登場するメドゥーサは、見た人間を石化させる力を持っていた(写真 12)など例を挙げればきりが無い。



(写真 11)

中国古代の金文 懼れる(おそれる)という文字



(写真 12)

メドゥーサ ベルニーニ作
ローマ・カピトリニ美術館

さて話を戻すと、激化する部族間の闘争や食糧問題により、島の人口は減り続けモアイ信仰は顧みられなくなった。それに替わって現れたのが鳥人崇拜だ。(写真 13) 毎年 7,8 月になると伝説の神マケマケが新しい季節を告げる渡り鳥の使者を使わす。一番鳥が渡ってくると鳥人儀式が始まる。これは各部族から選ばれた屈強の若者がオロンゴの 2 km 沖合に浮かぶ小さな島モトゥ・ヌイ(写真 14)に泳いで渡り、最初に生み落とされたゲンカン鳥の卵を持ち帰るといったものだ。これを持ち帰ってきた部族の族長が島の政権を握る取り決めにより、長年にわたる部族間の争いに終止符が打たれたのだ。



(写真 13)

伝説の神マケマケのレリーフが残る岩 鳥人儀式はこの崖を 200 m 下ってモトゥ・ヌイまで泳いでいく



(写真 14)

一番奥の島がモトゥ・ヌイ

島民は高度な社会生活から未開の生活に戻ってしまったが、資源もなく貧しいその環境に順応し、新たな宗教を手に入れ、また島には平和が訪れたかのように見えた。しかし 19 世紀

にはいると欧米の大型捕鯨船などが数多くやってくるようになり、アメリカのアザラシ猟の船は数十人の島民を労働力として連れ去り、さらに 1862 年にはペルー船が島民のほとんどを奴隷として連れ去った。奴隷として連れ去られた人々は過酷な労働と伝染病でほとんど死んでしまい、一年後に島に戻れたのはたった 15 人だった。その結果鳥人儀式も 1866 年を最後におこなわれなくなった。さらに悪いことには彼らは島にそれまでない伝染病を持ち帰ってしまい、島の人口は 111 人にまで激減した。

このようなことから島の文化はことごとく破壊され、ロンゴ・ロンゴを読める人もいなくなった。しかし読める人がいなくなってもその資料が大量に残っていれば、古代エジプトのヒエログリフや楔形文字のように後の時代にまだ解読のチャンスはある。最終的にこの文字を解読不能にしたのはキリスト教の宣教師だった。宣教師はロンゴ・ロンゴを悪魔の文字としてその彫られた板を他の文化財とともに焼き捨ててしまったのだ。

こうなるともう取り返しがつかない。ものがなくなっても言葉や文字は文化の最も核心的な部分として残る。それを失うことによってイースター島は数々の謎を残したままモアイとともに静かにたたずむだけとなった。(写真 15)



(写真 15)

イースター島で唯一海に向かって立つアフ・アキビのモアイ

タヒチを中心として、ハワイ、イースター島、ニュージーランドを結ぶ太平洋に広がるポリネシアは、豊かな緑と美しい海によりまさに「楽園」という言葉が当てはまる島々である。(写真 16) イースター島には正座した初期のモアイ像があるが、これはタヒチ島のティキ像と同じ姿勢をしている。(写真 17) このような同じ巨石文化を持つことや DNA 鑑定からもイースター島の住民はタヒチ島から渡ってきたものと考えられている。しかしこの二つの島を比べるとその様相はあまりにも異なっている。同じ民族で同じ文化を持っていた人々なのに、少しの選択の違いや地理的・気候的条件によって、その結果はこんなにも大きな差になって現れてくるものなのか。

イースター島で起こった歴史は多くの示唆を与えてくれる。人類は環境の違いによりさまざまな文化を作り上げてきた。そして世界各地で同じような歴史を繰り返してきた。ではなぜ人類は同じような歴史を繰り返してきたのか。それを知るためには一度文明の始まりに立

ち返り、その構造をたどっていく必要がある。



(写真 16)

タヒチ島から数km離れた緑あふれるモーレア島



(写真 17)

左がタヒチ島のティキ像 右がイースターの初期のモアイ



(写真 18)

島のあちこちで見かけた馬の死体

②1 現在のイースター島は強風を避けるため、ユーカリが植林されている。街には少しずつ緑が戻っているが、10年ほど前からそれまでになかった豆科のルピナスの一種が入り込み、まるで植林したように全島に広がっている。この植物の豆には毒があり食用に向かないばかりか、家畜が間違えて食べて死ぬこともあるそうだ。(写真 18)

②2 地層の中の花粉の種類や割合を調べ、過去の植生・気候環境などを推定すること

「スーパー大辞林」電子辞書版

農耕の開始

人類の歴史を考える上で重要な転換点は今から約1万年ほど前とヒプシサーマル(hypsithermal)期^①である。この二つの時期は気候の大変動期にあたり、人間の生活に多大な影響を与えた時期である。おそらく1万年ほど前まではどの地域でも人類は同じような狩猟採集の生活を営んでいた。この時期の大きな変化は更新世の最終氷河期が終わりにさしかかり、地球全体が徐々に温暖化してきたことだ。この温暖化によって今まで雨の多かった地域に雨が降らなくなったり、海面が数10メートルから100メートル以上も上昇した。その結果それまで陸続きだったいくつかの場所は島嶼地域になった。日本の動物層を見ると、奄美諸島以南と本土とでは動植物の分布が大きく異なっている。これは日本の国土がかつて大陸と陸続きであった地域とそうでない地域のあったことを示している。

気候変動に関して以前は広大なサハラ砂漠にも草や木が生えていたことが知られている。エジプトに旅行した友人のサハラ砂漠土産に、鉄の結晶らしき物体をもらったことがある。本人が専門家に調べてもらったところ、これは枯れた植物の茎に水の中の鉄分が残り結晶化したもので、いわば当時の水の記憶だということであった。サハラ砂漠には時折こんな石が落ちていているらしい。

有名なギザのスフィンクスにも雨によって浸食された跡が残っている。これはヒプシサーマル期の降雨が原因だと考えられる。しかし、ギザの三大ピラミッドはヒプシサーマル期とは数百年以上のずれがあり、そのことは大スフィンクスがピラミッドと同じ時期に作られたとする従来の説と矛盾することになるが、ここでは詳しく触れない。

いずれにせよヒプシサーマル期が終わり、偏西風の流れが変わるとサハラ砂漠にはほとんど雨が降らなくなった。たとえば現在エジプトのカイロの年間降水量は21mmであり、これは日本の夕立の1回分ほどにすぎない。雨が降らなければその土地の植物は育たず砂漠化してゆく。この砂漠化は現在進行形で、地球上では毎年東京都に匹敵する土地が砂漠化しており、その面積は地球上の土地の5分の1を占めている。

ちょっとした気候の変化にも人間は意外と弱い。日本でも10年ほど前の冷夏で米が育たずタイ米を輸入したことは記憶に新しい。このように気候の変動が続けば、それまでそこで暮らしていた人々は移動を余儀なくされ、砂漠化した土地の周辺に追いやられてしまう。これらの地域はたとえばチグリス、ユーフラテス川沿いであり、ナイル川沿いであった。メソポタミアとは「二つの川の間土地」を意味するギリシャ語名であるが、メソポタミア文明を育んだチグリス、ユーフラテス川の西側にはネフド砂漠、ルブアルハリ砂漠、シリア砂漠が広がっており、東側はカビール砂漠やルート砂漠が広がっている。これらの砂漠に追われるようにして人々は豊かなメソポタミアに集まってきた。しかしもう以前のような完全な狩猟採集の生活はできない。それをおこなう土地も無く、動物もいなくなってしまったからだ。ただ人口密度ばかりが高くなった。

狩猟採集もできず、人口のみ増えれば飢餓の可能性が増す。その危機を救ったのが農業の発明であった。乾燥化、砂漠化と同時に農業が開始されたことは余りにも都合がいいように思えるが、恐らく人類は狩猟採集民の知恵として農耕が始まる前から食用でき、しかもその気候に合った栽培に適した植物を知り、それを他の植物と選別していたと考えられる。中には旧石器時代末期のマンモスやサーベルタイガーといった大型動物が絶滅した事実を原始農耕と関連づけて考える学者もいる。^②

日本の縄文人も基本的には狩猟採集民であったが、同時に大規模な定住の跡も発見されており、粟や陸稲などの食用になる植物を栽培していたこともわかっている。定住できるということは食料が豊富であったことを示しており、移行期には狩猟採集と農耕とが二つの対立した概念ではなくて、半農、半狩猟、あるいは農業は食糧を得るためのほんの補助的手段であって、お互いを補足しあう関係にあったのだろう。その証拠に食糧が豊富な時期は農耕が放棄されることもあったようだ。そう考えればメソポタミアの人々が狩猟採集民から農耕民に数千年かけて徐々に移行できたことは推測できる。

そして本格的に農業が始まると人々の生活は大きな変貌を遂げるようになった。まず作物の維持、管理をするために同じ場所に留まらなければならなくなった。このことはさらに定住を推し進める結果となった。メソポタミアでは最初の半定住から本格的に定住が始まるまで 3500 年経っているが、その間確実に定住はすすみ、そして完全な定住生活になると人びとの価値観は大きな変貌を遂げることとなった。

まず人々は以前よりはるかに多くのものを持つことが可能になった。狩猟・採集時代より多量の食料を一気に得ることができるようになり、食糧のストックが生まれたことで生活の余裕が出来たのだ。それまでの狩猟採集生活では広大な面積を移動しながら生活していたので生活必需品以外はなにも持っていなかった。食糧は移動しながら手に入れられたので必要以上は持たなかった。狩猟採集民ではないが現在でもモンゴルなどに生活する遊牧民は移動の容易な組み立て式天幕を家としており、身の回りの必需品しか持たない。シリア、ヨルダンなどの国にもベドウィンと呼ばれる遊牧民が少数存在するが、山羊や羊を飼い、草のある土地を放牧しながらフェルトで作った実に簡単なテントで生活している。^③しかしものを持たないからといって狩猟採集民を単に貧しい未開の人間と結論づけることはできない。調査によれば狩猟採集民の労働時間は平均 3~4 時間なのだ。これは農耕、牧畜民よりはるかに短い労働時間である。あとの残った時間を自由に使えることを考えれば、ある意味うらやましい生活である。

食糧のストックは実は大きな意味を持っている。食料をストックするということは富を蓄えるということである。その結果として土地の概念や所有の概念をも生み出したのである。「ここは私の土地であり私の作物であり、あなたのものではない。」といった感情が生まれたのだ。このときに自分と他人の概念や、自然と人間といった自分を客観化する対立概念が生まれたのであろう。日本でも江戸時代には



(写真 19)

タチチ島先住民の仮面

各大名の権力を表すのに石高、つまり米の生産力があてられていたことは周知の通りだ。

ではそれまではどうであったかという、狩猟採集民は原則として平等であり、誰かが捕らえた獲物はその集団で公平に分けられ、独り占めするということがなかった。彼らは食糧採集を通じて環境と非常に密接な関係にあり、自分や他人、あるいは人間と動物、自然と人間、さらに死者と生者といった区別はなく、自然界すべてとの相互依存の中で環境と渾然一体となって生活していた。西アフリカのドゴン族の身につける仮面や衣装は、動物や自然神である精霊、あるいは祖霊との一体感を表現しており、アメリカインディアンやタヒチ島のものもそれと同じである。(写真 19) いわば生態系の中に自ら組み込まれて生きてきたわけだ。また、大地は生活のすべてを与えてくれることから厚く信仰され、生命を生み出す母なる神として地母神信仰も生まれた。

- ⑨1 6000 年前 [6500 年前とする説もあり] をピークにする温暖な期間。太陽活動が活発で、年平均気温は現在より 2 ~ 4 高かった。約 7000 ~ 5000 年前まで。
- ⑨2 人間はささやかなものであるにせよ、農業という生きていくための補助手段を手に入れた。それにより獲物の数が少なくなっても狩りの手を休めることはなかった。その結果として我々の直接の先祖であるクロマニヨン人は、大型動物の狩猟民であり、一万年以上共存したネアンデルタール人を絶滅に追いやったとする説。

「農業は人類の原罪である」コリン・タッジ著 新潮社
- ⑨3 ベドウィンは山羊や羊の放牧をしながら昔ながらの遊牧生活をする人々をさすが、最近ではそれぞれの政府の政策もあり、徐々に定住生活に移行している。

地母神信仰

狩猟採集時代、移行期間、そして初期の農耕時代には多産と繁栄のシンボルである胸やお尻の大きなビーナス像が出土するが、これらは地母神と呼ばれている。(写真 20) 大地は生命を支えるすべてであり、無から生命を生み出す力を持ったものである。そして女性にも同じ力を認め、大地と母性とが一体となって信仰されたものが地母神といえる。これはある一定の地域に見られるものではなくて世界的に共通のものである。日本でも縄文時代の遮光式土偶などは地母神土偶であろう。さらに古くはラスコーの洞窟からも地母神の石像が発見されている。



(写真 20)

地母神像の数々 ギリシャ考古学博物館

言葉や神話からもそのことを窺うことが出来る。たとえばラテン語の「人間」は、「大地」という言葉に由来しており、ギリシア神話に登場する大地の女神ガイアは天空の神ウラノスを生んだとされる。旧約聖書においても神は土からアダムを作り出している。

このように世界各国で地母神信仰はおこなわれており、各地の遺跡からもそれを証明するように地母神の土偶や石像が多く発見されている。(写真 21) また様々な言葉や神話からもいかに大地を神聖視していたかが窺われる。地母神信仰を農耕と結びつける学者もいるが、農耕ばかりではなく大地に対してのさまざまな信仰が相まって生み出された信仰であろう。おそらく最も初期の地母神に対する考え方はアメリカインディアンの次のような言葉に代表されるだろう。



(写真 21)

縄文時代中期のビーナス像
茅野市尖石考古館

私の母である大地

私に従う若者たちは、決して働いてはいけない。

働く人間は、夢を見ることができないからだ。

われわれの知恵は、夢から生まれてくる。

あなたがたは私に、大地を耕すように要求した。

しかし、刀で母の胸を引き裂くことなどできようか？

そんなことをしたら、死んだときに私は誰の胸のなかに飛びこんで休めばいいのだろうか？

あなたがたは私に、土を掘って石を探せと言った。

しかし、母の肌を裂いて骨を探しに行くことなどできようか？

そんなことをしたら、死んだときに私は誰の身体に入って生まれ変わればいいのだろうか？

あなたがたは私に草を刈れと、草を乾燥させて、草を売れと、

そして白人のように金持ちになれと言った。ああ！

母の髪の毛を切ることなど、

どうして私にできようか？

「スモハラ」『聖なる大地上の裸足』
「神はなぜ生まれたか」オドン・ヴァレ著より

地母神信仰は様々に形を変え時には狩猟採集の神になったり、農耕の神になったりした。しかしその信仰も完全な農耕時代にはいり、収穫を決定するのが大地よりも降雨や日射による要素が大きく、灌漑農法などにより人間がそれを管理することが出来るようになると顧みられなくなった。人間が収穫を決定できるようになると徐々に大地の母性はその神格を失っ

ていき、人々はほかに神性を求めるようになる。たとえばそれは太陽の神であり、ユダヤの神などである。

もちろん世界を見渡すと今でも女性や大地に神性を認める風習が各地に残っている。たとえば日本では東北地方のいたこや沖縄のさんじんぞう、ユタと呼ばれる霊媒師は現在の科学万能の世界でもその霊力を保っており、人びとは自分で判断できない相談事や心配事、あるいは祖霊や自然神との交信のためにこれらの巫女を必要としている。また地鎮祭なども大地を神聖視し、産土（うぶすな）神や大地主神を祀るとこしずめの祭りである。そしてこういった信仰の残る地は今も豊かな森が広がりさまざまな神が生き残っているのが特徴である。つまりアニミズム的地母神信仰が形を変えて生き残っているということができよう。

芸術家誕生

さて食糧のストックによるもう一つの変化は、農業に従事しなくてもいい特別な職業の人々を生み出したことだ。つまり、その土地全体を管理する支配者、祈りやまじないや占いをする司祭、それと身の回りの様々な道具類を作る職人（芸術家）である。ここではじめて狭義で言う芸術家という職業が生まれた。それまでは広義に言う芸術作品はあったにせよ芸術家はいなかった。一人の人間が芸術作品を作ることに専従するということがなかったのだ。描かれたものや作られたものは集団として共有されるものであって専門家による特別な技能ではなかった。

それと限られた場所で土地の概念が生まれると、当然土地（食糧）をめぐるいざこざが起こる。そこで外敵からの安全を保証し、自分たちの領土を広げるための兵士もそのときに生まれた。兵士はある時は土地を守り、ある時は他の土地を奪い、その結果戦いに敗れたものは奴隷となり権力者のさらなる権力に荷担するような構造が生まれ、人口が増え、他の土地への進出や開墾も行われた。こうして次第に人類の定住空間が拡がり、都市が生まれ、やがて都市と都市との戦争も起こるようになった。そしてまた戦争に敗れたものは奴隷となり、さらなる大権力が生まれるようになった。歴史に残る巨大な遺跡はこうして作られていった。

④1

組織的な農業の始まりはさらに数や文字も生み出した。どういった育て方で、どのくらいの量の農作物が収穫できて、どのように収穫して保存してさらにどのように分配するか。これらすべてを管理するためには長さや重さといった数の概念がなければならない。また言葉に対応する文字もなければ大きな組織を統轄することはできない。言葉によるコミュニケーションは少人数にしか届かず、しかも人づてにどんどん変化していつてしまうからである。さらにいつ種をまくか、いつ収穫するかを知るために天文学も発達し、正確な暦も生まれた。さらに法律などが整備されて国家が形成された。

このようにして人類は農耕と共に現代に繋がる文明の礎を築いていった。

④1 スウェーデンのストックホルム国際平和研究所によれば、2004年の世界の軍事費は前年度比5%のびて1兆350億ドルに達した。米国が全体の47%を占め、それに続くのは英国、フランスで5%、日本は4番目の4%であった。これは日本の2003年度の国家予算約82

兆円を軽くオーバーしている。

行事と言葉に見る農耕・芸術

こうしてみると、文明というのは農耕とともに始まったことが理解でき、文化活動のほとんどは農耕をルーツとしていると言える。もちろん戦争もその中に含まれている。狩猟採集時代にも小さいいざごはあったにしても、人を殺すために作られた「武器」はなかったと考えられる。事実、縄文時代の遺跡からは人を殺すための武器は発見されていない。戦争も農耕の副産物なのである。武器、家具、



(写真 22)

出雲大社境内にある土俵

調度品、文字、暦や数字、そして「美術」も農耕とともに獲得されたのだ。

現在でも生活の多くの場面で農耕に関するいくつかの習慣や行事が営まれている。これは日本のみならず世界的に共通して見られることである。たとえばユダヤ教の三大祭りである過越祭は、牧畜祭りと麦の刈り入れの農耕祭が結合したものであったが、後に出エジプトの歴史的意味が加わったものだ。また復活祭はキリストの復活を祝うものだが、春分のあとの満月に続く日曜日におこなわれることを考えれば、作物の生長に関わる太陽の復活と関係があると考えられる。

日本でも普段の生活の中で行われている様々な行事の多くは、実は農耕と関係が深い。たとえば祭りの多くは豊作を祈るものだし、相撲も元は豊作を祈るための神様への捧げものだった。出雲大社をはじめ、多くの神社の境内に土俵があることからそのことは窺われる。(写真 22)さらに正月に神社にお参りに行くのも稲作を守ってくれる神様をお迎えする行事であるし、神仏に捧げた鏡餅を割って食べる鏡開きなども田んぼへの鍬入れの日である。

このように世界中で収穫祭をはじめとする農耕に関する多彩な行事が今も延々と続けられているが、言語の中にも芸術と農耕の関係を示す証拠がちりばめられている。たとえば先ほども述べたが、ラテン語の「人間」は、「大地」という言葉に由来しており、ドイツ語の技術(Kunst)と芸術(Kunst)は同じ言葉であり、どちらも何らかの材料を加工または処理する技術活動とみなされている。これは農耕における技術発達に端を発している。また英語のアート(art)やイタリア語、スペイン語のアルテ(arte)はギリシャ語のテクネ(techne)の訳語であり、現代語の(technique)の語源であり、(Kunst)と同じように「技術」に端を発している。さらに英語の文化(culture)は農耕(agriculture)と深い関わりがあることは明らかで、二つとも(culture)を共有しており、動詞の(cultivate)「耕す、耕作する」に由来する。

一方「文明」の英訳は(civilization)であるが、これは都市化という意味を含んでおり、前出のように農耕 定住 都市化という流れを考えれば文明(civilization)も農耕の産物で

あることが理解できる。

このように芸術も農業の産物であることは前述の通りだが、日本語の「芸術」という言葉の成り立ちも見逃せない。これは「芸術」を芸と術に分けて考えるとわかりやすい。「芸」は「藝」の略字で、「術」は方法や通り道という意味である。では「藝」は何かというと、「草木を植えること。『園芸・農芸』」（広辞苑第五版 岩波書店）とある。また他の書物によれば藝は「寄せ集めた土の上に草の生えている図形」や「植物に手を加えて育てる図形」などを合わせて「要するに、『自然のものに手を加えてかたちよく整えること』を意味する」（漢字の成り立ち辞典 加納喜光著 東京堂出版）とある。これはまさに農耕そのものである。農業は自然の中から人間に有用な動植物を取捨選択し育成して、土地を利用して生産物を得る活動を指すものだ。様々な芸術の所作は実はこれと同じなのである。

さらに「かく」ということばを繙いてもその出自がわかる。絵描きは絵を「描く」。書家や詩人は文字や文章を「書く」。銅版画家はニードルで「掻く」。彫刻家はのみで「欠く」。このように芸術家は様々な「かく」行為をその根源に持っているが、これらに共通する「かく」とはなんだろうか。辞書によれば「描く」と「書く」は明快な区別が無く、どちらも「掻く」が語源で「先のとがったもので物の面をひっかく意が原義」とある。続いて「掻く」を調べると「爪またはそれに形の似た道具類で物の面をこする。1、爪を立ててこする。2、田を耕す、鋤返す。」（広辞苑第五版 岩波書店）とある。つまり画家が描く行為や詩人が言葉を書く行為はすべて農耕から出発した行為であり、それは人間が道具で世界を自由に作り替えてゆくことを象徴しているわけである。そしてこのことが芸術を含む文化や文明の構造だと理解できる。

ギルガメシュ叙事詩

このように人類は自然に対して積極的に働きかけることによって、それまでの自然と共に生きる生活、悪く言えば自然の奴隷から解放されて、他の動物とは違った独自の生き方を手に入れた。しかし人類のすべてが一拳にその生き方を選択したのではなく、砂漠の圧力に影響されたメソポタミア地域でまずその動きが起こったのはある種の必然と言えよう。

メソポタミア地域では B.C.9000 年頃に羊の家畜化がおこなわれ初め、B.C.8500 年頃に最初の半定住が始まった。B.C.8500 年ころにはヒトツブ小麦・エンマ小麦・大麦の本格的な栽培が始まっている。そのころの中国ではまだ黄河文明は片鱗もみえないが、もしかすると揚子江流域の河姆渡遺跡では水稲耕作文明が栄えていた可能性もある。これは今後の考古学的発見を待つしかない。アメリカ大陸では狩猟採集が続いており、日本列島は縄文時代であった。そしてニュージーランドやポリネシア地域にはまだ人類は到達していなかった。実はこのことが後の世界の歴史に多大な影響を与え、現在の不均衡な社会システムにまで大きな影を落とすことになるのである。

さらに B.C.5000 年頃にメソポタミアに本格的な定住が起こり、続いて大規模な寺院建築や車輪の使用がおこった。B.C.3500 年頃にはシュメールに最初の文字が現れ、大都市が出現し、大帝国の出現へと続いてゆく。

最も早く文明が開化したメソポタミア近辺の歴史は現代の我々に多くの示唆を残している。今から 5000 年前にメソポタミアで書かれた人類最古の叙事詩「ギルガメシュ」は、人類と自然との間の象徴的な話が登場する。それはウルクの王ギルガメシュがレバノン杉の森に出かけ、その森を征服する話である。（写真 23）少々長くなるがそれらの断片のいくつかを引用しよう。



（写真 23）

ギルガメシュ叙事詩には多くの欠落部分があり、[]内は訳者の推察に基づいて補われた部分であるが、それにより物語のあらすじがよくわかる。

ギルガメシュのレリーフ (B.C.1000 年頃)

イラン考古学博物館

杉の [森] を守るために
エンリルは彼 (フンババ) を人間たちへの恐れとして任命した。
フンババの叫びは洪水、その口は火、そのいきは死
森の [六十ベールにわたって野牛の雄叫びを] 彼は聴く
誰が森の中に行こうとするだろう
杉の森を守るためにエンリルは彼を人間たちへの恐れとして任命した
森へ行こうとする人間を弱気がつかまえる

第三の書板より

それでもギルガメシュは友人のエンキドゥとともに恐ろしいフンババのいるレバノン杉の森へ出かけていく。何度か挫折しそうになりながらも二人はようやくレバノン杉の森にたどり着いた。

ギルガメシュは手に斧を取り
[杉を] 切り倒した
[しかしフンババが] 物音 (?) を聞くと
怒り狂って (言った) 「誰がやってきたのだ
(そして) 私の山に生えた [木を乱し] 杉を切り倒したのだ」
(略)
大いなる風、北風、南風、つむじ風

嵐の風、凍てつく風、怒[濤]の風
熱風、八つの風邪が彼に対して起こった
[フンババの]眼に対してうちあたった
彼は進むことができなかった
戻ることもできなかった
こうしてフンババは降参した
そこでフンババはギルガメシュにむかって言った
「ギルガメシュよ、私を行かせよ
おまえは我が[主]となれ、私はおまえの家来となる
私が育てた[木々は]
[
切り倒し、家を[おまえに建ててやる]」
だがエンキドゥは[ギルガメシュに]むかって[言った]
「フンババ[の言う言]葉を[聴く]な
フンババは[生かしては]ならぬ」
(略)
ギルガメシュは首すじめがけて切りつけた
(略)
三度[目にフンババはついに]打ち倒された
大混乱が起[こり]静けさが[やってきた]
森の番人フンババは大地に[打ち倒さ]れた
(略)
森を[]、杉の木の[]、
エ[ンキドゥ]は森の[]を[]打ち倒した
(略)
[だが今や]山も静まり[かえった]
すべての山なみも[今や]静まり[かえった]
(略)
[こうして]エウフラテスの河岸へと
杉の木は[運ばれていった]

第五の書板より

「ギルガメシュ叙事詩」矢島文夫訳 ちくま学芸文庫

王であったギルガメシュはウルクの町のために森の木を切る必要があった。永住用の家の建材や暖房、調理用の燃料、またさまざまな実用品、工芸品、美術品のために木材は必要である。森の守り神であるフンババを殺し、その木を持ち帰ることで豊かな都市生活を送ることができる。また、引用はしていないがギルガメシュたちは旅の途中でさまざまな野生動物を打ち倒す。ライオンや人間の生活を脅かす大型動物を打ち倒すことで人々は安心して生活できるようになる。

さらに当時ウルクの町からレバノン杉の生育する土地までは相当距離があったらしい。物

語の文字通りとれば3日で1500kmの旅をしたことになり、これは花粉分析の結果、レバノン杉が現在のレバノン、シリア、トルコあたりに広く分布していた事実とあまり相違がない。



(写真 24)

レバノン杉でできた当時の屋根が復元されたペルセポリスの博物館の入口 赤く塗られた柱はまるで日本の神社を思わせる イラン



(写真 25)

王の副葬品の「太陽の船」バラバラに解体された姿であったが復元したら4.3mもの長さになった エジプト

レバノン杉は杉という名前が付いているが、実際は杉ではなく Cedars of Lebanon つまりシーダーである。その実や幹からは最高級のテレピン油のような香りがする。幹はまっすぐに立ち、硬く腐りにくいので家や船の建材にはもってこいの材料であった。メソポタミア周辺の古代文明にとってこの木はなくてはならないものであり、イランの古代遺跡ペルセポリス(写真 24)も天井や屋根はこの木で作られていた。またエジプトのクフ王のピラミッド近辺からは「太陽の船」(写真 25)と呼ばれる巨大な木造船が発掘されたが、これは王の来世のために副葬されたものでこれもレバノン杉で造られている。さらにエジプトの木棺の多くはこの木で作られていた。

しかし現在レバノン杉はほとんど残っていない。レバノンの国旗にも描かれているこの木は今や2000メートル級の高地にわずか1200本ほど残っているだけである。(写真 26)その規模は想像以上に小さく、おそらく人の手で保護していかなければすぐに消滅してしまうだろう。



(写真 26)

写真左の中央にレバノン杉の森 まわりにははげ山が広がるが当時は鬱蒼とした山々であったのだろうか 写真右は森の内部 松食い虫の一種に蝕まれ切り倒されたレバノン杉が見える



(写真 27)

チョガ・ザンビル B.C.13 世紀のエラム人の遺跡 建設当時は高さ 60 m 5 階建てのジックラトがそびえていた 写真右は雨水を逃がす水路



(写真 28)

B.C.2000 年紀のメソポタミア文明の都市のひとつマリ遺跡と周辺に広がる砂漠 ここから 6 km南下するとイラクとの国境がある

「ギルガメシュ叙事詩」の時代にはおそらく鬱蒼とした森が広がり、人の行く手を阻み、さまざまな野生動物が跋扈していたことだろう。この物語はシュメール人により楔形文字で書かれたが、その人種的系譜はほとんどわかっていない。その後セム人種であるアッシリア・バビロニア人が政治的実権を握り、シュメールの文化の多くを受け継いだ後もこの物語は語られ続けた。旧約聖書の成立が B.C.7 世紀、モーゼの出エジプトが B.C.1250 年頃だとすれば、それよりはるか昔に書かれたことになる。

メソポタミアのマリ遺跡やエラム人の遺跡であるイランのチョガ・ザンビル(写真 27)には大きなダムがあり、たびたび洪水に襲われた痕跡があることから、引用はしなかったが叙事詩中に出てくる洪水の話は旧約聖書の大洪水の話の元になっていると考えられる。さらにそのためジックラトと呼ばれるこれらの遺跡は高台に作られていた。また旧約聖書の「創世

記」11章、「バベルの塔」はこのジックラトをモデルに描いたものだ。

B.C.2400年頃のアッカド王国の国王ナラム・シンは北部への進入をはかり、当時レバノン杉の森の王国であったエブラを征服している。このことにより南部メソポタミアは膨大な木材資源を手に入れることができるようになった。

またイラクとシリアの国境に近いユーフラテス川沿いのマリ遺跡はB.C.2000年紀のメソポタミア文明の大きな王国の一つだが、現在周辺は見渡す限り砂漠である。(写真28)マリの経済文書には、当時すでに木材は輸入に頼っていたが相当不足していたこと、またそれにより経済活動が停滞してしまったことなどが書かれている。ギルガメシュのウルクの街はマリの遺跡からユーフラテス川を800kmほど下った地点にあるが、ウルクの街ばかりでなくここでもすでに役に立つ森林が無くなっていたのである。

押さえ込まれた自然・野生

さまざまな示唆に富むこの物語は、自然と共に生きてきた人類が自然から独立していく物語であり、見方を変えれば初めての自然征服の物語でもある。自然界の神の番人を殺すことにより、人間は人間のために自然を利用しつくし、そのあるじと成り得たのだ。もうそこには神はいない。むしろ家来になるというフンババの申し出に耳を貸さなかった人間は、自らを神の位置まで押し上げようとしたのかも知れない。

旧約聖書の創世記第九章の中にこんな一節がある。

「生めよ、増えよ、地に満ちよ。

地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなた方の支配に服し、

すべて生きて動くものはあなた方の食物となるであろう。先に青草をあなた方に与えたように、わたしはこれらのものを皆あなた方に与える。(以下略)」

旧約聖書や新約聖書の[約]という言葉は[契約]のことであり、人間と神との契約のことである。前出の旧約聖書の創世記、第九章にはこんな言葉が載っている。

神はノアおよび共にいる子らに言われた、「わたしはあなた方およびあなた方の後の子孫と契約を立てる。」

ここでは人間は動物や植物と契約を結んでいるわけではなく、自然界すべてを支配する契約を神と結んでいるのだ。ギルガメシュ叙事詩が書かれてから二千数百年、このように人間はまるで神のように振る舞うことを許されるようになった。

このように自然を人間の管理下に置きそれを利用し
尽くそうという考え方が生まれると、それまで神の位
置を占めていた野生動物や植物はどうなったのか。ギ
ルガメシュの物語に見るとおり、それまで神性を保っ
ていた植物は生活に役立つ「材料」になり、動物は悪
魔に姿を変えた。その代表が「蛇」であろう。蛇は一
撃のもとに大型の動物や人間を倒すことが出来る。ま
た脱皮して新しい命へと生まれ変わり、永遠の命を持
つものと考えられた。自然がまだ人間の管理下でない
時代には驚異的な力を持つこの動物は神であった。
B.C.1500 年期の両手に蛇を持つクレタ島出土の女神
の像は有名であるが、その周辺地域においても蛇に関
するさまざまな遺物が出土している。（写真 29）



（写真 29）

エーゲ海沿岸より出土した蛇と巫女
の彩色テラコッタ B.C.14 世紀
ギリシャ考古学博物館

アニミズム的性格を持つ日本の神社の中
には、八百万の神とともに蛇を祀っている社も
ある。（写真 30）また神性を持った自然の象
徴として、数百年生きた樹木には注連縄が巻
かれた。さらに「鶴の恩返し」や「浦島太郎」
など、日本の昔話には動物に関する物語が数
多く残されている。これは多くの動物が人々
の生活に密接に関係しており、自然と人間と
いった対立概念があまりなかったことを物語
っている。そこでは人々が狐に惑わされたり
狸に化かされたりした。事実明治時代までは
「自然（じねん）」という「本来そうあるべ
きこと」という概念はあったが「自然（しぜん）」
という現在の意味で使う概念はなかつ
た。

「自然（しぜん）」という言葉は明治時代
になってからの造語であり、対象を客観化



（写真 30）

栃木県佐野市の赤見の弁財天
白蛇を祀ってある

するために作られた言葉である。

一方ヨーロッパ世界においては動物たちはその性格を大きく変え、旧約聖書では悪魔としての蛇がアダムとイヴをそそのかして禁断の実を食べさせてしまう。さらにギリシャ神話ではゴルゴ三姉妹の一人メドゥーサも同じ運命をたどる。髪の毛が蛇で見たものを石化させる力を持つメドゥーサはいわば自然の脅威の象徴であろう。しかしメドゥーサはもとも豊穡の女神であって、トルコのナザーはその目を様式化した魔よけグッズである。

イスタンブールにあるローマ時代の地下貯水槽イエレバタン・サルヌジュ、日本では地下宮殿といわれているが、ここに魔物としてのメドゥーサが置かれている。この地下は昔から知られてはいたが、1984年底に溜まった2メートルもの泥を取り除いたところ、泥の中から柱によって押さえ込まれた2体のメドゥーサの頭部が出てきた。(写真31)

人びとは誰も入らない暗闇の中で、頭を逆さまにして押さえ込まなければならないほどこの神を恐れたのであろうか。



(写真31)

地中海沿岸では豊穡の女神として祀られていたがギリシャ神では化け物に姿を変えられた

環境への影響

一旦文明を手に入れた人間は、自然を利用しながら生活と自然とのバランスを保っていかねばならない。しかし人間の生活は思いもよらぬところで自然に負荷をかける。最近のオゾン層の破壊の元凶とされるフロンガスなども、発明当初は人畜無害の夢のガスとされたものだ。このように自然の生態は、人間の感知し得ない非常に微妙なバランスで成り立っており、人類が自分たちに都合のいいように自然を造り替えていくことはこのバランスを崩す原因の一つになる。

農耕の開始にともない定住型の社会が成立して人口が着実に増加するようになると、環境に加わる負担も増大していった。環境の変化というものはわずかな年数や人の一生くらいでは気がつかないのかも知れないが、農耕の拡大に伴って確実にその影響は広い地域に拡大していった。自然に対して勝利したかのように見えた人間だが、定住型の生活がおこなわれるようになってから1000年程たった頃その影響が現れ始めた。この1000年という数字は見方によっては永遠と思われるほど長い時間であり、人類が農耕を手に入れてからの1万年という時間で見ればあっという間の出来事である。ヨルダン中央部での調査によれば、この地域では紀元前約6000年ごろには土壌浸食が発生し、作物の減収につながり村落が放棄された土地があったらしい。前にも書いたように、さまざまな用途のために森林を伐採してゆく必要があった。また木が切り取られた場所もさまざまに役立てられた。たとえば農地になり、羊

や山羊の放牧にも使われ、あるいは居住地を広げていった。

では森林が伐採されるとどのような影響があるのだろうか。森林の生態系は垂直構造を持ち、地中、地表、地表に近い草本の繁る空間や幹や梢、葉の先端に至るまで、湿度、温度、日射量などさまざまであり、そのことで森林は多様な生物の宝庫となり、種の多様性に貢献している。この「種の多様性」が同時に多神教を生き永らせているといえよう。また植物は二酸化炭素を吸収して酸素を作り出す。海の珊瑚や海草などにも同様の作用があるが、光合成による二酸化炭素の固着と酸素の供給は生物にとってかけがえのないものである。森林はその大きな部分を担っているため、それが大量に伐採されれば、温暖化効果などにより地球の生態系に大きな影響を与える恐れがある。

そのほかにも土壌流出のおそれがある。樹木が根を張ることによって土壌はしっかりと支えられ、雨などによる土壌流出を防いでいる。そしてその土壌を作り出しているのも樹木である。落ち葉や枯れ枝などが微生物によって分解され、腐植土の層が出来上がる。この腐植土にはアンモニアなどが含まれており、それにより植物は更に生育を続けることが出来るという生態系を築いている。腐植土は保水力に優れており、森林伐採が続くと腐植土が減少し地表の保水能力が低下していく。保水能力が低下すれば地面は降り注ぐ雨を保つことができず、雨が降ればそのまま土壌が削り取られていく事になる。これにより洪水や土砂崩れがおこるばかりでなく、養分を含んだ土壌が失われることにより作物の減収につながり、森林の回復を困難にしている。

さらにこういった保水能力のない土地ではその地域全体の水分量が徐々に減少してゆき、雨が少なくなり、干害を引き起こし、土地が枯れていってしまう。こういったさまざまな問題がさらなる悪循環を呼び、やがて不毛の地となってしまうのだ。(写真 32)



(写真 32)

岩盤がのむき出しになった山 雨による
浸食のあとがよくわかる イラン

またメソポタミア地域での農業は小麦農業であるが、乾燥に強い小麦は農耕が始まる前からこの地に自生しており、しかも比較的荒れた土地でも栽培することができるという利点があった。しかし小麦は米に比べて連作障害を起こしやすいという欠点があり、耕作による一時的な土地利用は裸地状態を生み土壌侵食を進行させてしまう恐れがある。さらに乾燥地帯に広く普及している灌漑農法は降雨だけにたよる天水農法より人工的な環境を作り出す。

うまく管理すれば農業生産の拡大に役立つが、



(写真 33)

イランの小麦畑 休耕地が所々にある

管理が悪いと余分な水が地下に浸透し、地下水位が上昇し、地下から高濃度の塩分を運び上げ、最後には塩分が地表をおおって農耕が不可能になる。これを避けるには、土壌を長期間休ませ、水の与え方を徹底的に管理しなければならない。（写真 33）

これらの問題はその後発展したクレタ、ギリシャ、あるいはローマといった国々でも発生した。ギリシャの山々は森林の破壊により表土が流出し、岩盤だけになり再生不可能な状態になってしまった。（写真 34）

砂漠が年々増えていることから解るとおり、土地を痩せさせないで毎年一定の収穫を上げるのは非常に難しい問題である。世界中どの国でも食糧の生産量を上げたいのだが（日本は減反政策という世界に類を見ない食糧減政策を掲げている）農耕に適した土地は限られており、その生産量には限界がある。したがって養える人間の数も自ずと限定されてくるわけだ。しかも水分蒸発量の多い乾燥した暑い地域では一度農業に失敗してしまうと、塩分の表出により取り返しのつかない不毛の地になってしまう。（写真 35）



（写真 34）

ギリシャのアクロポリスの丘からの眺め 山には高木はなく灌木とわずかな草と岩盤が見える



（写真 35）

パルミユラ遺跡群 その向こうに広がるのはムー塩原
たとえ水があっても農耕のできない不毛の地だ シリア

日本の農業(日本の基層文化)

文明と農耕が初めて花開いたメソポタミア地域ではその気候により農業は牧畜と小麦栽培であった。それらは乾燥地帯に適した農耕であり、数千年にわたり世界最初の文明を継続させてきた。それに対して日本の農耕は水稻栽培が主流である。理由はわからないが米と一緒に日本の国土に入ってきててもよさそうな、山羊や羊といった家畜は輸入されなかった。米だけ入ってきて山羊などの家畜が入ってこなかったこと。あるいは小麦ではなく米が入ってきたこと。このことはおそらく現在まで続く日本の文化や宗教に多大な影響を与えていると言えるだろう。

前掲で見たとおり米作農業も小麦農業も農業であるからには自然のままの生態系に多大な影響を与えることには変わりはないが、その様相は大きく異なっている。米と小麦の特徴を見ていくと、稲は空気の通り道である気孔があり、葉から根へ空気を送ることができる。このことにより根が完全に水没する水田で生育することができる。一方小麦には気孔はなく水田では生育できない。しかしもともと乾燥地帯原産の小麦はその必要もないのであるが。また水田に水を張ると土の中の酸素が微生物により使われ酸欠状態となる。このことを還元状態と呼ぶが、還元状態になると土壌が中性付近に保たれ、カビなどの有害成分が死滅し、病害を防げる利点がある。しかし一定の期間水田に水を張り続けるためには相当量の降雨がなくてはならない。また水田には畦と水を通しにくい鋤床層という粘土状の層も必要である。小麦にはそういっためんどくさいシステムは必要ないが、水田は畦と鋤床層により降雨は一定の期間そこに溜められ、徐々に地下に浸透してゆき表土も流出しにくい構造になっている。一方小麦栽培などの畑の場合は、相当の傾斜地でも栽培できる利点はあるが、表土は土砂となって流出しやすい。連作については稲は土と水から養分を吸収するので土のみから養分を吸収する小麦より連作障害を起こしにくい。しかし水から養分を得るためには水田の数倍の森林が必要で、森林がなければ肥料の供給はストップしてしまうか、化学肥料でまかなうしかない。(写真 36)



(写真 36)

栃木県佐野市の田植え時期の風景

このようなことから考えると、1年を通して温暖で雨が多く、山は急峻で、国土の3分の2が森林に覆われている日本はまさに稲の生育に適した地と言えるだろう。しかしもし米と同時に山羊や羊といった家畜が日本の国土に入ってきていたらその様相は今と全く違ったものになっていたかも知れない。山羊や羊は牛が食べられない茎の硬い部分まで食べることができ、木登りも上手で木に登って新芽を食べたりする。これらの家畜がいなかったことがおそらく国土の67%も森林を残すことに貢献している。

田んぼと自然環境については、たとえば一番身近な野鳥であるスズメは稲も食べてしまうのであるが、稲につく害虫を多く食べることからなくてはならない存在である。以前中国で稲の害鳥としてスズメの駆除がおこなわれたことがあったが、次の年には稲の害虫が大発生して飢饉をまねいたことも知られている。ニホンアマガエルも水田の害虫駆除に大きく貢献していることが宮城県古川農業試験場の研究データで裏付けられている。このカエルは水中、水面のみならず、稲穂に登って害虫を食べることができるので、駆除効果はかなり高い。ドジョウは水田の泥の中に潜んで土をかき回す役割をしている。トンボの幼虫のヤゴは田植えで水田に水が入ると卵からかえる。そしてミジンコやイトミミズをえさにして夏に羽化し秋に卵を産み、次の春にまた水田に水が入ると卵からかえる。ザリガニは泥をかき混ぜ他の昆虫を捕獲するが、同時に稲の茎も傷つける。ホタルは水田が養う初夏の風物詩であろう。

このように田んぼはカエル、ヤゴ、タニシ、ドジョウなどさまざまな生きものの住みかとなっており、それらをエサとする多くの鳥も養っている。田んぼに関わるさまざまな昆虫や動物は、身近な自然として日本人の感性に深く影響を与え、日本の基層文化を形成していると言える。

さらに日本の基層文化を考える場合に忘れてはならないのが縄文時代である。日本列島は狩猟採集に適した土地であったと言える。季節がはっきりしており、春には木の芽や貝、夏には魚、秋には木の実、冬には熊やイノシシなどを狩るというように季節ごとに違った食料が手にはいった。縄文時代は基本的に狩猟採集生活であったと考えられるが、最近の発掘調査で縄文時代の大規模な建造物の跡が発見されたり、構造の似ている遺伝子を持つ粟が出土したり、エゴマ、シソ、豆類などの種子や花粉が発見されたりして話題になっているが、このことはこの時代の人々が環境に大きな負担をかけないように細心の注意を払いながら、最低限の原始的農業も同時に行っていたことの証明になる。そして大陸から弥生人とともに本格的な農耕文化が伝えられてからも、様々な生活習慣は引き継がれた。弥生人が縄文人を駆逐したと考えられがちだが、戦争が起こった記録はない。むしろお互いの持つ文化が人々の生活の中に浸透していったと言ったほうがより近いかもしれない。そして縄文人の生活習慣は、現代の日本人の生活にも少なからず受け継がれていると思われる。

縄文人が現在の日本人のルーツであるかどうかは諸説あるが、現在まで人間が暮らしながら自然環境に壊滅的ダメージをあたえないでこれたことは、誇るべきことだと言える。今現在これほど多くの自然が残っていることは、日本列島に人が住み始めた時期や農耕が開始された時期と生産作物、さらに地理的条件、宗教などが奇跡的に自然環境とバランスを取らなければ起こり得なかった。人間が生活してゆくうえでの基本的な行動は世界中どの民族も大差ない。しかしひとつひとつの小さな選択の差が、集まれば大きな文化の差となって表面化してくるのだ。

しかし豊かな自然環境を持つ日本ではあるが、経済的問題から自国の資源を使わずに世界

の熱帯木材消費の多くを占めるようになった。今後はそのシステムを変え、熱帯雨林保全に関して多くの役割を果たすべきであろう。

砂漠と森の思考

イランを車で旅している時、昼時になるといつもガイドのレザが「Are you hungry? 」と聞いてきた。こちらはおなかがへっているようなへっていないような、どちらでもない状態で即答できないでいることが多かったのだが、そのことが彼をいらつかせたらしい。もし yes ならば今通過中のこの街で食事。no ならば次の街まで 40～60km、多い場合には 200km ほど走っていく。街と街の間には砂漠地帯か山岳地帯か、いずれにせよ人間の憩えるような場所は何もないわけで、日本のように気が向けばどこでも食事というわけにはいかない。ここでは yes、no の判断は非常に重要で曖昧な返事はできない。途中というものが無いのだ。日本人的な気遣い、たとえば「Are you hungry? 」と聞かれて、こちらはおなかがへっていないのだが、向こうはへっているのかな。ではここで食べた方がいいのか。などと考え回して「どっちでもいいよ」などという返事は無用。むしろそれは相手を困惑させるだけなのだ。

他の場面でもそうだ。「おもしろかったか? 」ときかれてこちらはどちらでもない「普通」なのだがそういうわけにはいかない。good か bad を答えなければいけない。常に二者択一的だ。ここでは中間の項目は許されない。砂漠地帯の人びとはそうやって生きてきたのだろうし、そうあらねばならない必然性を持っている。いいか悪いか、過去か未来か、あるいはあるかないかといった時間や戒律に厳密で、常にどちらか一方を選択する進歩の思想を伴ったこの考え方は、科学の発展や文明の発達に貢献し、強烈に近代文明を推し進めてきた。1 か 0 かで考えるコンピューターの考え方もこれと同じだ。

宗教の場面でもそのことははっきり言える。砂漠地帯の神は日本の神のようにいるのかいないのかははっきりしない、いわば気配で感じるような神ではない。唯一絶対の神というものがあ、それ以外の神はいない。砂漠地帯で生まれた宗教といえばユダヤ教であり、それを基にして生まれたキリスト教、さらにイスラムである。これらの宗教はみな一神教であり、いわば砂漠に人間が追われることによってこれらの宗教を生み出したと言える。今回旅したイラン・ヨルダン・シリアなどは砂漠地帯が多く



(写真 37)

木が一本もない岩山 イラン

(写真 37)、そこではほんの少しの選択

の差が命取りになり得るのである。また自然のままの生活は死に直結することになり、どうかして自然を改変して生きてゆかなければならない。前掲の通り文化は大なり小なり自然を改変してゆくものだが、砂漠近辺では森林地帯のそれとは比べものにならないほど自然状

態に手を加えなければならぬだろう。対して森林地帯で生まれた宗教は仏教、神道、アニミズム、ヒンズー教など多神教だ。森林ではさまよい歩くことで食糧や獲物に巡り会え、自然状態にほんの少し手を加えるだけで生きていけた。そしてそのことが不可思議で不確定な多くの神が生き残る要素を残してきた。

神の出現の仕方も砂漠地帯と森林地帯とでは大きく違っている。たとえば新約聖書の「ヨハネによる福音書」によれば、「はじめに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。すべてのものは、これによってできた。」とあるとおり、まず神という明確な観念(意識)があった。これは日本を含めた多神教の神々の出現の仕方と全く違っている。カンボジアには乳海攪拌という神話があるが、濁った乳白色の海より女神ラクシュミーなどが生まれたとされる。つまり混沌たる世界から神々が生まれたのである。日本の『古事記』では、この世のはじめは天と地の境もなくもやもやとして泡立ち、混沌としたものの中から三柱の神が生まれた。もう一つの『日本書紀』では「太古の昔に、天と地がまだ分かれず、陰陽の別もまだ定まらなかったとき、卵の中身のように混沌として固まっていない中に、ほのかで暗く、よく見えない何かが生まれた」とある。つまり多神教の神々は森林の多様性と相まって混沌とした中から生まれたといえる。

またエジプトは基本的に多神教であるが、太陽神の神話は一神教と多神教をミックスしたようなところがあり興味深い。太陽信仰の中心地ヘリオポリスでは原初の海ヌンから太陽神アトゥムが出現し世界を作ったとされる。太陽神アトゥムは唯一絶対の神であり、いわば一神教の始まりの神でもあった。しかしその神は原初の海より生まれている。さらに混沌とした原初の海は闇の世界でアトゥムはそこで大気と湿度、つまり新たにシュウ神とテフヌト女神を作ったとされる。ここで多神教に戻っている。



(写真 38)

クラック・デ・シュバリエ 城砦は積み上げる建築の最たるものだろう シリア



(写真 39)

住宅の入口。ここだけで外界とつながっている
ヤズド イラン

このように出現の仕方から大きく違う神々の性格は当然文化全般に影響を及ぼしてくる。たとえば街の作り方は街道沿いにだらだらと続く日本の街と違い、砂漠地帯やヨーロッパの

街では城壁により完璧に内と外を区切っていた。これはもちろん外敵の侵入から街を守る性格を持つもので外敵の侵入しやすいこの地域では当然のことなのだが、そもそも味方と敵とを明確に区別する考え方は二者択一的である。家に関してもこれと同じである。レンガによって積み上げていく構造が中東からヨーロッパにかけての主な建築方法だが（写真 38）、これとも相まってイランの伝統的な家屋は壁により外と完璧に遮断し、通り沿いには小さな扉がついているだけで中はまったく窺えない。（写真 39）しかし中に一步はいると大きな中庭があり開放的で非常に居心地がいいものである。

中国で発明された漢字の「国」という字を見ても国の考え方がよくわかる。国の旧字体は「國」であるが「口（くにがまえ）」は城壁であり、この境界を戈（ほこ）をもって守ることを合わせて「國」とした。さらに口の中に一を加えて或としたがこの一は土地のことである。（「新大字典」講談社）すなわち城壁に囲まれた土地を武器を持って守っていることが国の原義である。

国という漢字自体はそのまま拝借した日本であるが、国の考えはずいぶん違っている。

国土のまわりをすべて海で囲まれている島国であることから内側を完璧に城壁で囲う国の考え方は的が外れていた。このことは家についても言える。日本の家屋は柱構造で非常に開放的で、また軒も張り出しており中と外の区別はさほど明確ではない。また障子や屏風といったものでフレキシブルに空間を変えることができる。気候も温暖で湿気も多く柱に適した木材もふんだんに手にはいることから、この形態も当然の成り立ちなのだが、その裏にある宗教観も忘れてはならない。

宗教の施設にも同じことが言える。ヨーロッパのキリスト教の教会は外の喧噪とまったく違い見事に神の世界を表現している。ここでは天、すなわち神の世界に向かって限りなくのびてゆく建築、それに付随した聖人たちの彫刻、壁には聖書の物語が描かれた絵画、窓は神々しい光を通すステンドグラス、さらに雰囲気醸し出すろうそくの光に賛美歌、床にはさまざまなモザイクといった具合に、空間全体がまさに神の世界を作り上げるために一致団結しているのである。ここでは一步外に出た現実世界とはまったく異質の天上世界が展開している。イスラムのモスクは偶像崇拜を禁止するという性格の違いから、神の世界を表現する具体的なものは何もないが、内部は非常に



（写真 40）

マスジューデ・ジャーメモスク

エスファハーン イラン

美しい抽象模様のもザイクで埋め尽くされており、明らかに神秘的で恐れ多い雰囲気を出している。(写真40)ここでも表現しているのは外の世界とは違った天上世界である。

このような一神教の宗教施設に対してたとえば日本の神社はどうだろうか。まずその神域は鳥居によって区別されている。しかし表参道などに見るとおり、鳥居だけぽつんとあって明確な城壁などはない場合が多い。さらに第二の鳥居、第三の鳥居といった具合にだんだんと神域に近づいてゆく予感を感じさせる。そして中心には注連縄を付けられた祠や社があるが、その中には鏡、もしくは何も置かれていないことが多い。神々は姿を見せずその地に鎮もっているのだ。姿を見せないことで神々の神秘と気配が守られるのである。そしてその最も原始的で完璧なものは奈良の三輪山であろう。三輪山はその山全体が神域でご神体なのだ。ここでは特定の何かが神聖なわけではなく、土や空気や動物といったその山を取り巻くすべてが神聖なのだ。つまり自然そのものを神として祀っているとも言える。

注連縄も鳥居と並んで神聖なものと不浄のものとの分ける境界に使われるのであるが、注連縄はより強い力をもっているようだ。注連縄は社に取り付けられていることが多いことから最後の神域への境界を思わせ、また注連縄が文献として初めて登場する『古事記』では、天照大神が天岩屋戸から出てきたとき太玉命が急いで岩屋の入口に注連縄を巻いた。これにより天照大神は岩屋戸に戻ることができず、地上は明るさを取り戻したのである。

注連縄は稲藁で作られていることから稲作農業と深く関係していることは確かだが、同じ『古事記』に登場する神の名、高御産日神(たかみむすひのかみ)、神産巢日神(かみむすひのかみ)に見るとおり、「ムス」すなわち「産す」と「ヒ」すなわち「霊力」をもった神への信仰を感じさせ、縄をよったその形態からもお互いを「むすぶ」性的で原初的な信仰を連想させる。



(写真41)

出雲大社拝殿の注連縄

神無月には神々が集まり神在月になるという出雲大社には日本一大きい注連縄が巻かれている。(写真41)この注連縄の奥に拝殿、本殿、本殿の裏には鬱蒼とした森に覆われた八雲山の山並みが連なっているのだが、ここでも我々一般の参拝客は手前の拝殿までしか入れない。八雲山にも足を踏み入れることは禁止されている。大国主命がお隠れになっているのだ。

一般にあって日本の神社や聖域は高い城壁により区切られているものでもなければ明確に画定されているものでもない。しかも神の姿を見ることもできない。いわば雰囲気によってじわりと感じさせる性格のものなのだ。そのような不確定な気配でしか感じられない神々はややもすると唯一絶対の力を持つ神に駆逐されてしまう恐れがある。事実一神教が生まれた地でもはじめはさまざまな神がいたが、やがて唯一の神に駆逐されてしまったのである。自分の現世ご利益だけを祈るような神に対する態度ではとうてい唯一絶対の神には対抗できない。これはムスリムが祈りの時間になると全身全霊を傾けて、たとえ仕事の真っ最中であっても礼拝を欠かさないという場面に何度も遭遇して感じたことだ。もし多神教を本気で信じるのであれば現世利益だけではない神々への畏れと敬いがなければならないだろう。

しかしおそらく戦後神々に対する畏れや敬いといった感情は次第に薄れてきているのではないだろうか。日本は欧米の近代思想に学び、それを必死に自分のものにすることによって植民地支配から逃れ、経済的には欧米と肩を並べられるほどにはなったが、その副作用としてすべてのものを経済として扱うようになり、経済以外の価値観や自身の持っているアイデンティティーを見失いかけているように思われる。

大航海時代(ヨーロッパ文明を支えたもの)

自然を人間の管理下に置き、利用し尽くすような考え方の理性的文明は、このように砂漠地帯で生まれ、やがてヨーロッパを中心に絶大な繁栄を誇った。世界史の教科書を見れば地中海を中心としたこの地域にさまざまな文明が興っては消えていったことがよくわかる。「森と文明の物語」安田善憲著(ちくま新書)はその文明の興亡を森林資源の利用と枯渇に結びつけて論じている。確かにギリシャの山々はまるで岩砂漠のようなはげ山だし、サントリーニ島から見る地中海は美しいのだが、その美しさは涅槃の美しさである。ギリシャやローマ時代のモザイクや壁画を見るとさまざまな海の幸が描かれており(写真42)、当時は豊かな漁場としての海であったのだろうが、今はそうではない。ギリシャで食べた魚介類が肉の3倍もの値段がしたことを考えても地中海が痩せ海だとわかる。



(写真42)

ポンペイから出土したモザイク画
ナポリ考古学博物館

またローマ時代のカエサルの記録文学『ガリア戦記』(B.C.51)にはガリアの地(現在のフランス)は60日間歩いてはまだ端にたどり着けないほどの森林が広がっていたことが記されている。これはすでにギリシャやローマといった先進国では役に立つ木材が減少しており、まだ手つかずの森林を残すガリアの地への征服も目的であった。しかし今はその文献によって当時を回想するのみである。

このように先進の文明は森を求めて次々に地中海沿岸、ヨーロッパ中に広がっていったが、それも14~15世紀までであった。それ以前はヨーロッパの中の資源で事足りたが、そのころになるといよいよ資源の枯渇が表面化してきた。本来ならばこの時点でヨーロッパに興った文明は崩壊するはずであったが、ヨーロッパ人は技術の発展によりその危機を乗り切った。地中海から外に出て外洋をわたることのできる大型船を作れるようになったのだ。それに乗り遅れたのがたとえばヴェネチアである。(写真43)

当時ヴェネチアは地中海貿易により大いに繁栄していたが、森林資源はほとんど消失していた。そのため大型船を建造するための木材を手に入れることができず、他のヨーロッパ諸国に対して新世界への侵略が大きく出遅れてしまった。これ以降ヴェネチアは一大方向転換をし、祭りや芸術といった方面に力を入れるようになった。

油絵用のキャンバスはこの時代から使われ始めたが、その理由は、絵画を輸送するために板よりも軽いキャンバスを使用するようになったのだと考える人もいるが、実は森林資源の減少が主な原因である。そもそも板絵といってもさほど重くはないし、絵をさまざまな場所に移動することも当時は考えられない。絵描きは教会や貴族の要請にこたえてそこで絵を描くのが一般的であり、今のように絵描きが好きな絵を描いてそれを展覧会に出したり画商を通して売買するという形式ではなかったからだ。

それにどうしても板を接げばその継ぎ目に割れや反りといったものができる。板は一枚板



(写真43)

水の都ヴェネチア 隣の家は
完璧に付き少しの隙間もない



(写真44)

板の継ぎ目による画面のひび割れ
パラティーナ美術館のバロック絵画

の方が優れている。(写真 44)しかし一枚板の大きなものは非常に高価であるばかりか入手困難であった。当時大きな良質の板はほとんど手に入らなくなっていた。それとキャンバスに変更されたもう一つの要素は、遠洋船の帆布用に糸のよりが強く丈夫で幅広い布地の加工技術が発達したことがあげられる。この技術は早い段階でキャンバスに転用された。油絵の具も当時の科学技術の発達により生み出されたものだが、透明に絵の具を塗り重ねることのできるその技法は、平面上に空間と奥行きを作る技術として、それ以降のヨーロッパ絵画の中心をしめることになる。(表)

時期	画家名	支持体
14	ドゥオッチオ	板
15	ファン・エイク	板
15	フランチェスカ	板
16	ダ・ビンチ	板
16	ボッシュ	板
16	チッティアーノ	キャンバス
17	カラバッチオ	キャンバス
17	エル・グレコ	キャンバス
17	ベラスケス	キャンバス
17	レンブラント	キャンバス
17	ルーベンス	キャンバス・板

表 ホルベイン工業株式会社「作品に見る素材の変遷」抜粋

大航海用の大型船を作るためにはさらに大木が必要になる。当時すでにヨーロッパ地域では良材は数少なくなっていたことは上記の通りだが、ヨーロッパの経済を発展させるため、また大国間の競争に勝つためにヨーロッパ諸国は相次いで新大陸の発見に出かけた。しかしヨーロッパの世界観の拡大により世界のあらゆる場所で悲劇が起こった。辺境の地日本はその中で例外で、政治的にも経済的にも最後まで独立を保つことができたのは幸いであった。

しかし、ヨーロッパから近いアメリカ大陸、アフリカ大陸あるいは当時まだ狩猟採集や原始的農耕を営んでいた世界中の先住民はきわめて深刻な痛手をうけた。ヨーロッパ人は先住民の文化や生活習慣、歴史といったものにほとんど興味を示さず、その土地や人から徹底的に搾取した。そしてオーストラリアのアボリジニ、太平洋の島々の先住民など、世界中の先住民社会がヨーロッパの影響を受けて崩壊していった。

自然の豊かな楽園であると前掲したタヒチ島でも、実はヨーロッパ人との接触により多大な損害を被った。彼らの運んできた病気とアルコール、さらにココナツ油を搾る奴隷労働のため、4万人ほどいた人口は彼らの到着から70年ほどで9000人にまで激減し、その生活習慣や宗教、文化といったものは完全に破壊されてしまった。私がタヒチ島を訪れたとき、島を一周して原住民の遺跡を訪れたのだが、その数は最近修復された一カ所と、(写真 45)ほとんど崩れ落ちた海岸に残されたものの2カ所しか発見できなかった。

ヨーロッパ人の搾取と略奪は特に新大陸アメリカにおいて凄惨を極めた。最初にコロンブスが到着したエスピノーラ島は、鬱蒼とした緑に覆われ当時 300 万人もの人口を養っていたと推定されている。しかしスペイン人のサトウキビプランテーションのために森林は次々伐採されてゆき、50 年ほどで島のほぼすべての木は失われてしまった。そればかりかコロンブスの到着からわずか 20 年で島のインディオの人口は 300 万人からわずか 1 万人ほどに減少してしまっただ。これは製糖工場での奴隷労働と戦争とヨーロッパ人が持ち込んだ病原菌のためであった。そして



(写真 45)

修復されたタヒチ島の原住民の神殿 マラエ

1520 年代には 2000 ~ 3000 人にまで減少し島の文化と自然と人間はすべて破壊された。その結果製糖工場主たちは働き手に困ることになり、その打開手段としてギニアから黒人奴隷を連れてきた。アフリカから製糖工場に送られた奴隷の数は 100 万人近くにのぼったとされる。その黒人奴隷も過酷な労働から「7 年生きれば長生きした方だ」(「森と文明」ジョン・パーリン 晶文社)といわれた。

また 1519 年にスペイン人はアステカ帝国を征服したが、当時のアステカの人口はおよそ 2500 万人であったのが、1600 年頃には 100 万人にまで減少した。これもエスピノーラ島での出来事と一緒に、金、銀の採掘などの奴隷労働と戦争、原住民にはまったく抵抗力のない病原菌のために何千年にもわたって発展した高度な社会はあっけなく崩壊してしまっただ。しかも侵略者は原住民の文化にまったく興味を示さず、アステカやインカでは、ほとんどの金銀でできた財宝は溶かされてヨーロッパに運ばれた。このようにして 1500 年からの 150 年間でスペインには新大陸から 200 トンの金と 15000 トンの銀がもたらされたという。

人物画と風景画

このようにヨーロッパ人は 16 世紀から 19 世紀にいたるまで、自分たちの繁栄のために世界中の先住民をまるで人間扱いせず使役してきたが、どうしてそのような蛮行を平気のできたのであろうか。これはヨーロッパ人の宗教思想にその根拠を見ることができる。何世紀にもわたるキリスト教思想はそれに先立つユダヤ教の思想とともにヨーロッパの世界観を形成してきた。そこでは人びとは自分たちの信じる唯一絶対の神と契約によって結ばれており、自然や異教徒を自由に収奪し得る権利を得ていると信じていたのだ。だから自然の改変はまったく当然のことであり、むしろ未整理な自然環境を改善していくことは進歩の過程の一部であった。そのことはヨーロッパの整然とした庭園と日本の自然を摸した庭園を比較すると

よくわかる。また異教徒に対しては彼らの持つ文化や習慣を改変して正しい神の道に導くか、それに従わないものは破滅するのが当然であるという考えをもっていたのである。

このような考えから神に似せて作られた人間の姿は美しく、それに引き替え自然の風景は不完全で美しくないものであった。したがってキリスト教圏では、おびただしい神や人間の彫刻、絵画が作られることとなった。一方風景が描かれる場合は人物の背景としてか、あるいは素描であった。まれに単独で描かれる場合があっても牧歌的な田園風景(これは人間が作り上げた人工的な景色)であった。風景(Landscape)という言葉は16世紀のオランダ語に始まったものだが、もともと人間により躰けられ、管理された自然の一部という意味であった。つまりそれは自然というよりも文化的な側面を持っている。このようなことから自然の風景画が独立して描かれたのは、さまざまな場面でキリスト教の価値観が揺らぎだした18~19世紀のターナーやコンスタブルあるいはフリードリヒを待たなければならない。

一方東アジアでは風景画は主に山水画と呼ばれ、中国古来の神仙思想(山岳を仙人や珍獣の住む霊的世界と見なし信仰する思想)に基づく自然観照から生まれた。ここでは人間は大自然の一部にすぎない。唐代にはすでにその基盤はできあがっており、宋代には著しく発展して完成したので1000年以上前から描かれていたことになる。山水画以外にも身近な自然を題材にして描いた作品は、日本をはじめ東洋には西洋で描かれるはるか以前から数多く制作されてきた。

ヨーロッパ社会でも近代になると、宗教的、神話的な主題から脱し、静物画や風景画、さらに庶民の生活や風物を描くようになった。ここにきて初めて西洋絵画は主題の自由を手に入れることができたのだが、西洋における進歩の思想は根強く、その後の絵画も進歩の思想により変遷してきた。絵画は物語や主題から独立してゆきどんどん純粹化し、20世紀も終わりに近づく頃とうとうその形式は出尽くしてしまった。もし進歩の思想が正しければ絵画はこれで終わりであり、芸術は絵画以外の他の手段を選ばなければならない。しかし本当に絵画は終わったのであろうか。そもそも絵画に進歩はあるのだろうか。

日本では『絵画』という言葉自体、明治以降西洋文明に対応するかたちで生まれたものだ。それまで『絵画』自体がなかったわけだから必然的に発した西欧社会での絵画変遷のリアリティーもなかったわけだ。そのことから考えても西洋絵画の方法や題材を日本の絵画と同じ次元で語ってはならないことがわかる。

そのことは同じ「美」という言葉の受け取り方を見てもわかる。日本とヨーロッパ世界との「美」感は大きく異なっているのだ。ヨーロッパ社会の母胎となったギリシャにおいては、人体比例や黄金分割といった美の基準が存在した。そしてこれらの美の基準は誰の目にも明らかのように数値化できる。このことは美を普遍化できる、絶対化できるということだ。すなわち、ヨーロッパの美術は彼らの思想、宗教と同じく「絶対」という観念に向かっていたといえる。

一方日本ではどうかというと、その宗教と同じく唯一絶対的な美というものは存在しなかった。大木に神性が宿るといようなアニミズム的思想に見るように、森羅万象すべてに美は遍在しているのだ。

漢字の「美」という字を繙くと、「羊」と「大」を合わせて「味が良く立派であること」から転じて、「良いこと、美しいこと」という意味になった。中国で発明された漢字本来の意味からいうと、「美」はギリシャの価値観と近いが、日本語の「美しい」という言葉の変

遷はそれとずいぶん違った成り立ちを示している。手元の辞書によれば、美しいとは「肉親への愛から小さいものへの愛に、そして小さいものの美への愛に、と意味が移り変わり、さらに室町時代には、美そのものを表すようになった。」とある。そして「美しい」の最初の項目に「愛らしい。かわいい。いとしい。」という意味をあげ、例として「万葉集 5 妻子（めこ）みればめぐし美し」また「枕草子 151 何も何もちひさきものはいと美し」といった文を挙げている。

このことから日本の美の概念が西洋や中国の美の概念とずいぶん違った成り立ちをしているのがわかる。日本人は大きく円環を描く循環的思想によって世界をとらえており、四季の循環や時の移ろい自体が実在であると考え、論理的には割り切れない愛情といった感情や立派ではないが愛しいといった状態に美を見いだしていたのである。これは直線的に神へと向かう進歩、発展の観念を持ち、絶対の価値観に裏付けられた西洋世界の思想とはまさに正反対の考え方である。

画題と画材

画材の扱いについても東アジアのそれと西洋のそれとでは大いに違っている。画材や画題もその文化の中から必然的に導き出されるものであるから、重要な比較対象になる。その地域に産出するかしないかの差はあるが、おそらく歴史の初期の頃の材料はどの地域もそれほど差はない。大きく差が出てくるのはやはりその地域によって独自の文化が花開いてからだ。15世紀以降で比較してみると、この時代は前掲の通りヨーロッパ社会が急速に拡大し、世界を席卷し始めた時代であった。さらに人間（といってもヨーロッパ人だが）中心の価値観が過去1000年の間で一番盛り上がりを見せた時代でもあった。絵画における遠近法の発明や空間を自在に表現できる油絵の発明はそのことと無縁ではない。遠近法は自分から見た視線が世界のすべてであり、価値の中心を人間（自分）に置くものである。油絵はその透明感から空間を自在に作れるという特色があり平面の中に奥行きを作るのに大いに役立った。

それに対して東アジアでは一点透視法や二点透視法は生み出されなかった。整然とした町並みや強烈な日差し、乾いた空気はここにはなく、絵画を数学や科学と結びつけて考えることもおこなわれなかった。しかしなにより一番の違いはおそらく自然に対する態度であろう。書画は科学や数学とは結びつかなかったが、自然や宗教、また生活とは深く結びついていた。材料に関しては東アジアの絵画は主に紙と水溶性の材料であったが、これらは湿度の多い霞んだ空気感を表現するのに適していたし、水墨画の画題に見る人間と自然の関係は対立するものではなく、人間はその一部であることを思い出させてくれる。また紙に下地処理をせずそのまま使い余白を残すという技法は、西洋絵画では全くの未完成を意味するが、色がなく、しかもかたちを線に託す水墨画ではそこに描かれたもの以外のさまざまな時間や空間、あるいは何かもっと他の不可思議へと見る人を誘う神秘の役割を担っている。これは何も水墨画に限ったことではない。金地の屏風絵にしる障壁画にしる、余白が金地に変わっただけで、すやり霞や金雲は空間や時間を自在に操る役目をし、同時に装飾性も増し複合的な世界を作り上げている。

一方ルネッサンス以降ヨーロッパでは、さまざまな材料が科学的に生み出されたり新世界

からもたらされ、ものを写實的に描出し深い空間を描き出すこと、よりダイナミックな画面を作り上げることが可能になった。神話や宗教の画題を借りながら西洋絵画は写実に向かい続け、写真のようにその一瞬を抽出するようになった。このことは19世紀の写真の出現で絵画の危機を招いた。写実ということに関しては写真の方が手っ取り早くしかもリアリティーを持ち得る可能性を秘めていたのだ。絵画はそこから脱すべくさまざまな主義、イズムを生み出していったが、前掲の通り進歩の思想で考えていけばもう終わってしまうのである。これに気づいた西洋人は、神話や物語を絵画の中に復活させ何とか絵画を蘇生させようとしている。

一方同じ時代の日本を見ると一部に油絵を試したり遠近法を試したりということはあったが、大筋では変化は見られなかった。顔料はその美しさを際立たせるためベタで使われることが多く、そのため絵は平面的であった。ここでは絵はその絵柄や空間ばかりでなく、顔料そのものの美しさも見せているのである。また絵の中に言葉が書かれることもしばしばあった。つまり鑑賞者は絵柄を見、画家の技量を見、顔料の美しさを見、言葉をかみしめてさらに余白を感じるというように絵を絵画としてだけでなく、工芸や文学などを含めて全的に鑑賞するわけだ。

これは西洋人から見れば日本人はまだ絵画というものを獲得しておらず、詩も絵も工芸も未分化であることを意味していたが、自然を外部にある対象として相対化していないことを考えればむしろ未分化な状態というのは当然のことであった。

このように絵画に対しての成り立ちや問題意識とが、ヨーロッパのそれと日本のそれとはまったく異なっていたのである。もちろん他の地域、たとえばイランやサウジアラビアなどのイスラム圏ではものの具体的な描写は発達せず、その代わりにまばゆいばかりの抽象的な装飾文様が著しく発達した。またインドなどのヒンズー教圏、あるいは共産主義圏、さらに気候や生活習慣の違った地域ではその地域なりのリアリティーがあり、それを同一線上に並べて優劣を付けることは決してできないだろう。

しかし明治以降日本人はヨーロッパ社会が歩んできた歴史を、まるで自分たちが歩んできた歴史のように勘違いしている節はありはしないだろうか。さまざまな思想はその人間の持つ文化的なバックボーンから導き出され初めてリアリティーを持ってくるものだが、今では多くの人間がこのようなヨーロッパ的な思想に染められてしまったように思われる。

今回の旅では、イランではイランのリアリティーをひしひしと感じたし、他の国々でもその歴史と現在のリアリティーを感じる事ができた。おそらく大切なことはさまざまな違いを認め、それを受け入れ、そこから自ずと導き出される、自分のあるべき姿や立つべき足場をしっかりと認識することではないだろうか。

終わりに

学生時代からどうもわからないことが多い。わからないことは多いのだが、『絵描きは手で考えるのだ』という言い訳をして、それら様々な疑問を言葉にしないまま放っておいた。そのまま放っておけばよかったのだが、教員という立場になると様々な若いエネルギーと出会う。彼らのエネルギーはそれらの疑問をほったらかしにしておくことを許してくれない。いつも学生のエネルギーは私を動かす原動力になる。私自身は様々な疑問に対して、さもわかったような顔をして学生と話しているのかも知れないが、とんでもない。ただ、学生に対して話をすることで、自分の考えや問題点の輪郭がおぼろげながら見えてきたのは確かだ。話をすることは言葉に思想や感情や認識や判断を託すことであり、そのことが少なからず私の意識の、あるいは無意識のもやもやとした実態のないシルエットを浮かび上がらせてくれた。日頃の不勉強のせいで辞書を引くことも多かったが、この辞書引きもまた様々な発見をもたらしてくれた。実際の言葉の意味と、自分の思っていたその言葉の意味のずれを発見したときは瞠目した。さらに今回の旅での様々な発見は、机上での思索を超えて多くの収穫をもたらしてくれた。今回このような文章を書く機会と取材の旅をもたらしてくれた学校関係者、並びに諸先輩方に深甚なる謝意を表し、旅の終わりといたします。ありがとうございました。

2005年10月 菊地武彦

参考文献（不順）

- 「西洋の眼 日本の眼」高階秀爾著 青土社
「日本美術を見る眼」高階秀爾著 岩波書店
「森と文明の物語」安田善憲著 ちくま新書
「農業は人類の原罪である」コリン・タッジ著 新潮社
「銃・病原菌・鉄」ジャレド・ダイヤモンド著 草思社
「緑の世界史」クライブ・ポンティング著 朝日新聞社
「森林の思考・砂漠の思考」鈴木秀夫著 NHK ブックス
「日本人の神」大野晋著 新潮文庫
「お米なるほどセミナー」 全国農業協同組合中央会
「神はなぜ生まれたか」オバン・ドレ著 創元社
「ギルガメシュ叙事詩」矢島文夫訳 ちくま学芸文庫
「歌の祭り」ル・クレジオ著 岩波書店
「ブリタニカ国際大百科事典」電子辞書版
「スーパー大辞林」電子辞書版
「広辞苑」第5版 岩波書店
「篆書字典」高澤翠雲編 西東書房
「漢字の成り立ち辞典」加納喜光著 東京堂出版
「聖書」日本聖書教会
「TWO STEPS FROM THE MOVE」ホームページ
「対話する人間」河合隼雄 講談社＋ 文庫
「日本多神教の風土」久保田展弘 PHP 新書
「地球の歩き方・タヒチ、イースター島、クック諸島」ダイヤモンド社
「地球の歩き方・イラン」ダイヤモンド社
「地球の歩き方・イスタンブールとトルコの大地」ダイヤモンド社
「地球の歩き方・ヨルダン・シリア・レバノン」ダイヤモンド社
「森と文明」ジョン・パーリン 晶文社
「古代エジプト人の世界」村治笙子著 岩波新書
「新大字典」講談社
ホルベイン工業株式会社「作品に見る素材の変遷」